

蔵本分館を大いに活用して下さい

山内 卓

はじめに

私が徳島大学に赴任した当時は、蔵本分館の学術雑誌（外国雑誌）が比較的充実しているように感じました。3年半ほど図書委員を勤め、その後現在の役をお受けしておりますが、その間に外国雑誌の高騰により購読の見直しが行われ、多くの雑誌が購入中止に追い込まれたことを非常に残念に思っています。なんとか、この状況を打開できないかと考えており、ここに現状をお伝えし皆様のご協力をお願いしたいと思います。

蔵本分館の特徴

1. 生命科学の中核を担う

蔵本分館は、医学部、歯学部、薬学部、分子酵素学研究センター、ゲノム機能研究センター、医療技術短期大学部が1つのキャンパスに存在し、共通に利用することができる全国的にも類がない非常に優れた図書館であり、研究・教育に中心的な役割を果たしています。この点を、

学生諸君、教職員、その他の利用者の方々はよく心にとめておいていただきたいと思います。また、教授の先生方の意見で図書館の運営の方針が決定されますので、先生方は努力して図書館に足を運んで下さいますようお願い致します。多くの若い学生や研究者が利用し、一生懸命勉学に励む姿を見ていただきたいと思います。

2. 蔵書数

多様な外国雑誌が継続的に揃えられており、現在は340種類購読しています。3年前は473種類購読していましたが、残念ながら急激に減少しました。しかし、他の大学や研究所の医学関係の図書館と比較（表1）しても、これ以上の減少を避け、さらに充実することが必要と思われます。

3. オンライン検索の充実

コンピュータが備えられ、オンライン検索ができます（平成6年から）。毎日非常に多くの方が利用しています。また、学内LANの整備とCD-ROMサーバーシステムの導入により、研究室からも直接アクセスできるようになり、図

書館に足を運ばなくても多くの情報が得られます（平成9年から）。

4．時間外開館

職員の勤務時間内では開館時間として充分でないという要望が多く、平成4年から夜間開館や土曜日の開館が行われています。

5．24時間開館

長年の懸案でありましたが、平成12年度より自動入退館システムの導入により、年末年始を除き、毎日学術雑誌が利用できるようになりました。その場でコピーをすることができます。研究者のニーズには十分答えることができますので、大いに活用していただきたいと思います。全国的にもまだ少なく、国立大学では20校しか実施されていません。

6．閲覧スペース

閲覧のスペースは比較的広く、また、個人的に使用できる閲覧机も備え付けられています。利用者は非常に多く、1日平均約540名の利用があります。学年末試験や国家試験の勉強の時期には特に多くの学生が利用しています。

7．コピー

平成7年から雑誌の館外持ち出しが禁止となり、何時でも目的の雑誌を見ることができるようになりました。コピー機が5台備え付けられ、コピー料金も安くなりました。カラーコピーもできます。

分館職員の活動

4月から定員は4名に減りましたが、図書館機能を充実させ、サービスを良くするために、非常勤職員を含めて11名が非常によく頑張っています。ご支援下さいますようお願いいたします。

1．雑誌・書籍の購入

年間約1,000タイトルの雑誌、3,000冊の書籍を購入しています。外国雑誌は、最近、価格の高騰と為替相場の変動に悩まされ、業者との契約に神経を使います。また、それらの利用度の調査等も行っています。学生用図書の選定は学部で行われていますが、その調整と整理を行っています。

2．雑誌・書籍の整理

購入した書籍をコンピュータに登録し、バーコードその他の印をつけ、書架に並べ整理して

います。雑誌が遅延することなく定期的に納入されることに注意しています。また、雑誌保存のため製本をしなければなりません。毎年約3,000冊について、業者へ依頼、受け入れ、整理を行っています。

1、2については、図書館備え付けのみならず、各研究室単位で購入している書籍の購入業務と整理も行っていることから、非常に大変な作業です。各研究室単位で購入している外国雑誌は、できるだけ図書館に備え付けていただくと、多くの人達が利用することができ、また、整理もしやすくなります。

3．学術情報・文献検索

コンピュータが良く整備され、資料の電子化を行い非常に使いやすい状況です。図書館利用に関する新しい情報を常時提供しています。電子メディア利用の指導もっており、調べたいこと、わからないことがあれば気軽に相談して下さい。

4．書庫・書棚の整理・整頓

コピーした書籍は図書館職員が、正確に元の書棚に戻していますので、容易に文献を探することができます（平成7年より）。本が重いこと、書架の高いところに戻すことなど、大変な仕事です。以前は、使用者が戻っていたため、間違いが多く探すのが困難なことが多々ありました。

5．文献依頼・依頼文献の複写

分館で所有していない文献は、他の図書館にコピーを依頼しています。1日平均22 - 23件あり、所有雑誌の減少にともない、依頼件数が増加しています。1人の職員が担当していますが、非常に大変です。依頼する時は、記入事項に間違いが無いようお願い致します。また、他大学・企業等からの複写の依頼も多くあります。

分館の経費

分館は大学の共通施設であり、学問の根幹をなすものであることから、基本的には各部局において相応の負担をして維持していくことが大切です。しかし、現在は維持管理費は均等に負担されていますが、外国雑誌の購入費などの負担は部局によって異なっています。各部局の経費負担は決して少なくありませんが、学問の中心となる良い図書館として、部局・研究室の特殊性に固執しないで全員で支えていくことに誇

りをもつことを願っています。

1. 維持管理費

大学全体の経常経費として文部省から配分される予算は減少傾向にあり、図書館経費も圧迫されています。諸経費の高騰により維持管理費も厳しくなってきました。図書館機能を維持するために、危機的な状況が近いうちに訪れるのではないかと危惧しています。

2. 外国雑誌の購入費

蔵本分館委員会では、部局の間で負担の不公平のないようにできるだけ平等にすることが決定されています。各部局のご協力をお願い致します。大学に配分される校費は微増にとどまっていますが、蔵本地区における研究費（外部資金）の獲得金額は、1999年度は校費と同規模にまで達しており、この5年間で5%以上増加しています。購入すべき外国雑誌の見直しを行うことは必要ですが、研究に必要な雑誌を維持することは充分可能であると思われま

3. 学生用図書、情報の費用

学生の勉強のための書籍の購入費等は、主として、文部省からの経費、学長経費、各学部の負担により充当されています。なんとか維持している状態で、とうてい充分とはいえません。

分館の課題

1. 外国雑誌の購入

これ以上の減少を避け、さらなる充実をはかることが望ましい。研究費を多く獲得している活発な研究者からのサポートが必要です。また、研究室単位で購入している雑誌は、若い研究者の要望も多く、図書館に備え付けることが望ましいと思います。電子ジャーナルは部分的に利用していますが、機器と記録媒体が常に更

新され古いものに対応できないことから、冊子体を確保しておくことが必要であると思います。しかし、コンピュータは、冊子体ではできないような、検索機能をもつことや、立体構造や時間経過などの三次元、四次元のデータを表示することができるので、電子ジャーナルも整備することが必要です。

2. スペース

平成6年に改築が行われ、閲覧室、書庫などのスペース不足が一時的に改善されましたが、蔵書の増加、コンピュータの導入等によりスペースの不足が起ってきました。新しく建物を確保することは当面困難だとすれば、空間の有効利用を考えていかなければなりません。

3. 社会人の利用

職員が不足していることから、サービスは積極的には行っていないが、ボランティアなどの参加をお願いするなどで、学術情報の発信源として、社会に貢献できると良いと思います。

その他

館内は明るく、空調設備も整い快適です。館内はよく整理整頓され、1階のロビーも快適で新聞もあります。できるだけ利用して下さい。

おわりに

多様な学術雑誌（外国雑誌）や書籍が何時でも閲覧できるよう揃えていることが、分館の最も重要な役割であると思ひ、現状を述べてまいりました。ご意見がありましたらお寄せ下さい。利用者の方々にとって少しでも快適な図書館を目指して微力を尽くしたいと考えています。どうか皆様のご支援とご協力をお願い致します。

表1. 医学系図書館備え付けの外国雑誌（学術雑誌）

蔵本分館		大学・研究所（1999年度）			
		日 本		海 外	
年度	種類	機 関 名	種類数	機 関 名	総種類数
2000	340	京都大学（医学図書館）	477	コロンビア大学 ¹⁾	4,400
1999	364	大阪大学（生命科学分館）	2,375	ハーバード大学 ²⁾	2,952
1998	439	岡山大学（鹿田分館）	239	アメリカ NIH ³⁾	21,000
1997	473	香川医科大学 国立循環器病センター	466 190		

1) Columbia University's Health Sciences Library : 種類数概数

2) Francis Countway Library of the Harvard Medical School

3) National Library of Medicine : 種類数概数

（やまうち・たかし 附属図書館蔵本分館長・薬学部教授）

平成 12 年度附属図書館事業計画について

木 村 伸 夫

去る 4 月 17 日に開催された第 1 回附属図書館運営委員会において承認された、今年度の事業計画の基本的事項についてご説明いたします。

今年度の事業計画の前提となる平成 11 年度の事業計画の実施状況、及び今後の課題についても触れていきたい。

1 平成 11 年度事業計画の進捗状況

本館では毎年「事業計画」を策定し、当該年度に何を目標に活動していくかということを描けております。翌年度の目標を設定する場合、それがどの程度達成され、何ができなかったか、明らかにしておくことが必要と思われる。

(1) 実施、あるいは開始された事項

本館の増改修計画の策定

本館は昭和 46 (1971) 年に新築 (3,484 愛) され、その後、昭和 53 (1978) 年に書庫の増設 (238 愛)、さらに昭和 60 (1985) 年に増改築 (1,620 愛) されており、本館の総面積は 5,342 愛である。

この間、蔵書数と利用者数の急激な伸びによる狭隘化、学術雑誌等の集中配置と共同利用の推進、利用者サービスの改善、さらに電子図書館的機能の充実・強化など「21 世紀の大学図書館の在り方」に即応するための増改修に迫られている。

これを具体化するため、4,000 愛以上の増築を目的として「徳島大学附属図書館本館増改修計画(案)」がまとめられた。

蔵本分館の 24 時間入退館管理システムの導入

蔵本分館は、医歯薬学系の図書館であることから、24 時間利用体制の確立が待たれていた。平成 11 年度の「教育研究特別経費(学長裁量経費)」により、同分館に「夜間入室管理システム」が導入された。

貴重資料の電子化

図書館貴重資料である「古絵図」、「伊能図」の電子化(高精細画像 D B)に科学研究費補助金により着手することができた。引き続

き、今年度以降も継続していく必要がある。貴重資料の補修

本学所蔵貴重資料のうち、損傷の進んでいる資料 8 点の補修を行うことが出来た。

事務組織の改編計画

図書館の電子図書館機能の強化を主な目的として、事務組織の改編計画を策定し、平成 12 年度から「電子情報係」を設置することが決められた。

(2) 今年度に引き継がれたこと

目録情報遡及入力の実体化

本学では、遡及入力の必要件数として約 36 万冊分の入力が残っている。平成 11 年度まで行っているが、年間処理件数は少なく、平成 12 年度以降の抜本的な方策が必要である。

本館・分館の管理業務の一元化

双方で行っている同種業務の効率化を目指すための検討をさらに継続すること。

日曜開館の通年実施

試験期のみでなく、年間を通じて日曜開館し、「いつでも利用できる図書館」を早期に検討していきたい。

2 平成 12 年度の事業計画

これからの本学附属図書館の基本的方向としては、去る 3 月に評議会で策定された「徳島大学の 21 世紀に向けての戦略」によることとなる。そのなかで、目標、及び計画に掲げられている事項・内容と附属図書館の今後の有り様が少なからず関係してくる。

今年度の事業計画のうち、基本的なものは以下のものである。

(1) 本館の増改修実現に向けて

「増改修計画」に基づいて、平成 13 年度概算要求の実現に向けて各方面との折衝を行っていく。

この増改修によって、附属図書館が本学における教育・研究の支援機構として、さらなる機能を発揮できるように最善の努力を払っていきたい。

(2) 電子図書館機能の充実・強化

本学所蔵貴重資料の電子化と画像 D B 検索シ

ステムの構築、図書目録情報の遡及入力、電子ジャーナルの整備・充実、本学の各学部で発行している「紀要」の目次情報DB（国立情報学研究所：前・学術情報センター）への遡及入力の促進、ホームページの内容充実などに取り組んでいきたい。

(3) 基本的な図書館資料の整備・充実

学生用図書選書システムの改善を行い、選書機会の増加、受け入れまでの迅速化、既存データの取り込みにより、業務の合理化にも結び付けたい。さらに学生用図書の「質」の面についても検討できればと考えている。

学術雑誌共同利用の推進については、各学部・教官の理解を得つつ、雑誌のさらなる集中化によるサービスの向上を図っていきたい。また、本館備付の教養雑誌・新聞の見直しを行う。

蔵本分館備付雑誌の整備を行うため、経費の合理的拠出方法の検討、重複購読雑誌の電子ジャーナルへの移行等も検討したい。

(4) 施設・設備の改善

図書館入退館システム及び導入後の年月の経過による老朽化の進んでいる大視聴覚室の設備更新については、平成13年度概算要求に提出しているが、早期実現を図るため、他の方法での可能性も希求していきたい。

Arielシステム（本館・分館間の画像伝送）運用のための機器整備

その他、閲覧室のカーペット敷設、閲覧机・椅子の更新、館内のサイン見直しなどがある。

(5) 蔵本分館の24時間利用

前年度に導入した「夜間入室管理システム」を実際に稼働させるための諸準備を行い、5月から夜間及び日曜日の利用を開始する。

(6) 図書館業務の改善・合理化

本館の日曜開館は試験期の1ヶ月のみ行っているが、これを年間を通じて行える方策を検討し、早期の実施に取り掛かりたい。

今年度は、図書館電算機システムの更新（平成13年2月）が予定されているが、「仕様書」によると、研究室からのILL（Inter Library Loan）申し込み、図書購入依頼の受付、（国立情報学研究所への）目録自動登録、及び学術雑誌の受付業務、特別貸し出し業務の効率化なども行える。

これらのほか、本館と分館の管理業務の合

理化、一元化、指定図書の見直しなどにも取り組んでいきたい。

3 当面の課題

(1) 目録情報遡及入力の早期促進

所蔵図書目録情報をデータベース（DB）化するという事は、従来のカード目録の大きな欠点に比し、飛躍的な効果を発揮している。DBの中に蓄積させておけば、端末機さえあれば、どこからでも、いつでも所蔵・所在情報を検索することが出来る。また、学術情報システムの基本的理念である“学術情報資源の共有”に全国的にも大きく寄与できることになる。

本学での未入力36万冊を昨年度の方法で入力していくなら、完了までに相当長期間を要することとなる。抜本的な方策を立てることは緊急の課題である。

(2) 電子ジャーナルの整備・充実

近年、学術雑誌の電子化とネットワークによる提供・利用技術は驚異的な発展を遂げている。外国の出版社、学術研究機関はこぞって電子ジャーナルに方向を転換してきている。この電子ジャーナルには、多くのプラス面を持っており（マイナス面もあるが）、今や研究活動にとってはなくてはならないものになっている。

しかしながら、導入には継続的な予算措置を伴うことである。

(3) 外国雑誌のさらなる集中

本館・分館の外国雑誌の図書館への集中率はまだまだ少ない。全学的共同利用、情報提供サービスの向上のため、さらなる集中化が必要である。

(4) 本学で生産する学術情報の発信

本学教官が研究成果の結果として生産される情報を提供し、広く発信していくことが求められている。紀要の目次情報のみでなく、「本文」も出来るようにすること（著作権処理が必要）。また、本学で授与した博士学位論文の情報、科学研究費補助金などによる研究成果の公開等々、大学として重要なことだろうと思われる。

(5) さらなる業務の改善・合理化

図書館サービスの向上のため、全学的な業務改善・合理化の動きとの提携、図書館固有業務においても、さらなる改善・合理化へ向けての努力は日常的な課題である。

（きむら・のぶお 附属図書館事務部長）



附属図書館整備・改善の歩み

区 分	実 施 経 過		
	平成2年度～平成6年度	平成7年度～平成9年度	
組織・機構	事務組織改組(平2) 部課制設置(平3) 附属図書館事務組織改組(平4) 館報編集委員会(平6) 附属図書館図書選定委員会(平6)	蔵本分館図書選定委員会(平8) 附属図書館将来計画検討委員会の設置(平9)	
図 書	総合	土曜開館実施(平4) 英文利用案内作成(平5) MLニュースを速報版に変更(平6) 学外者利用案内作成(平6) 本館夜間開館時間延長(平6)	自己点検評価報告書刊行(平7) 蔵本分館試験期夜間開館時間延長(平7) Library Announcement(すだち速報版)創刊(平9) 館報の刷新(平9) 本館書庫入庫制限の変更(平9) 特別貸出(教室貸出)方式の変更(平9) 図書館学外者利用申請の変更(平9) 図書館利用案内の刷新(平9)
	学習	共通教育選書計画策定(平4)	学生用図書購入計画の見直し(平9)
館	研究	情報検索サービス開始:JOIS(本館:平2) 大型コレクション整備(平3) ILLシステムによるサービス開始(平4) ファクシミリ文献複写サービス開始(平4) 大型コレクション整備(平5.7) ILLシステムによるBLDSCサービス開始(平6)	自然科学系特別図書の整備(平7) 大型コレクションの整備(平7) 自然科学系特別図書の整備(平9)
	保存		
機 能	電子	図書館専用電算機導入(平2) 学術情報センター接続(平2) OPAC運用開始(平3) CD-ROMによる情報検索サービス開始(平5) 情報検索ガイダンス(分館:平3～) CD-ROMネットワークサービス開始(平6) 図書館専用電算機の更新(平6) UNIX版OPAC(TELNET)運用開始(平6)	UNIX版CD-ROMサーバシステム(ERL)導入(平7) 電子メールによるILL申込受付(平7) 電子掲示板設置(平7) UNIX版図書館トータルシステム導入(平8) WWWブラウザによるOPAC運用開始(平8) 古絵図の画像データベース化(学内特別教育研究費)(平9) 図書館ホームページ開設(平9) CAサーバーの導入(平9) ERL(Current Contents, MEDLINE)検索講習会(平9)
事 業	泉山文庫目録改訂版(本館:平2) 学術情報に関する講演会(平3～) 学術情報センター地域講習会開催:目録システム(平4～5) 学術情報センター地域講習会開催:NACSIS-IR(平5) 国立大学図書館協議会総会開催(平5) 学術情報センター地域講習会開催:NACSIS-IR(平6)		
施設・設備	BDS設置(本館:平4) 情報検索コーナー設置(平5) 留学生資料コーナー設置(平5) 身障者用設備の整備(平6) 蔵本分館増改築(平6) 蔵本分館電動集書架設置(平6)	サイン整備(平7) 参考書架増設(平7) BDS更新(分館:平7) 学術雑誌閲覧室設置(平8) プリペイドカード方式複写機導入(平8) サービスカウンターの更新(本館:平9) 身障者用閲覧机増設(本館:平9) 図書自動貸出・返却装置導入(平9) 閲覧室椅子の更新(平9/10)	
要員研修	目録システム担当要員養成研修(平1～5)13名 大学図書館職員長期研修受講(平2～6)3名 総合目録データベース実務研修(平3～5)3名 情報検索システム担当要員養成研修(平5～6)23名	図書館等職員著作権実務講習会(平7)8名 大学図書館短期研修受講(平9)1名 図書館等職員著作権実務講習会(平9)1名	
規定・その他	資料不用決定取扱基準(平1決定) 図書選定委員会規約(平6)	図書選定委員会規約(平8制定) 貴重資料指定基準・取扱要領(平9) 徳島大学附属図書館広報委員会規約(平9) 徳島大学附属図書館館報発行要項(平9)	

実 施 経 過		今 後 の 課 題
平成 10 年度～平成 11 年度	平成 12 年度	
	分館情報サービス係と分館情報調査係の統合及び電子情報系の設置 管理業務の合理化、一元化	事務組織の改編 研究開発室の設置
学報掲載の統計情報リメイク(平10) 図書館将来計画の策定(平10) 夜間開館時間の通年延長(分館:平10) ボランティアの導入(平11) 日曜開館の実施(学生試験期間中)(本館:平11)	24時間開館(分館) 日曜開館の推進	情報リテラシー教育の支援 自己点検評価
「これならできる情報リテラシー」に参考資料掲載(平10) 参考図書コーナーの設置(平11)	学生用図書選書の迅速化	
学術雑誌の集中化(継続)(平11) 自然科学系特別図書の整備(平11)	学術雑誌共同利用の推進	大型コレクションの整備 自然科学系特別図書の整備 電子媒体二次資料の充実
	貴重資料の補修	収蔵スペースの確保
伊能図・古絵図の高精細画像データベース化(科学研究費)(平10～11) 資料ID変換ソフト開発(平10) CA on CD, CI on CDネットワークサービス開始(平10) 無料電子ジャーナルサービス開始(平10) 視聴覚ライブラリーシステム導入(平10) 貴重資料高精細デジタルアーカイブ(WWW)公開(平11) 雑誌記事索引のネットワーク提供(平11)	ホームページの充実 ネットワーク情報サービスの充実 図書館電算機システムの更新 目次速報データベースの遡及入力 電子図書館機能の充実・強化	貴重資料の電子化 電子メディア利用の拡大 OPACデータの整備(遡及入力) 新CAT / ILL への対応 医学中央雑誌のネットワークサービス 電子ジャーナルの整備・充実
学術情報センター地域講習会: ILL システム(平10) 資料ID変換及びバレル添付作業(平10) 徳島県立博物館企画展特別協力(平11) 新NACSIS-IR 説明会(平11) 中国四国地区電子的資料購入のためのコンソーシアム形成WG 参加(平11) 情報検索講習会の実施(平11)	資料展示会の開催 目録データ遡及入力 中国四国地区大学図書館研究会開催 国立大学附属図書館事務部長会議開催 学術情報に関する講演会の開催	
閲覧室椅子の更新(平10) マルチメディア・プラザの設置(本館) (平10) 特別資料閲覧室・展示室設置(平10) 雑誌閲覧室の整備(平10) カラーコピー機導入(分館:平10) 単体CD・ROM検索システム設置(本館)(平11) 貴重資料高精細デジタルアーカイブ閲覧システム(平11) オーディオビジュアル・メディカル室の設置(平11) グループ研究室の設置(平11) マルチメディア・コーナーの設置(分館:平11) 閲覧室机・椅子等の更新(平11) OCS端末機の増設(平11) 情報コンセントの設置(平11)	視聴覚機器の整備 夜間入室システムの設置(分館) Ariel システム運用のための機器整備	本館の増改修計画 自動入退館システムの設置
大学附属図書館短期研修受講(平10)1名 図書館等職員著作権実務講習会(平10)1名	職員研修会 HPの作成、運用	
徳島大学附属図書館インターネットによる広報実施要領(平10) 徳島大学附属図書館館報発行要領(平10) 貴重資料高精細デジタルアーカイブ取扱要領(平11) 徳島大学附属図書館ボランティア受入実施要領(平11) 徳島大学附属図書館オーディオビジュアル・メディア室利用要領(平11) 徳島大学附属図書館グループ研究室利用要領(平11)		

より開かれた図書館を目指して

雨 森 弘 行

大学図書館をとりまく状況

昨年6月に学術審議会から出された答申、あるいは一昨年の秋に出された大学審議会の答申においては、「21世紀初頭において、大学が教育研究の一層の向上を図り、引き続き地域社会における知的活動の中心的拠点としてその存在意義を保っていくためには、地域社会との連携・交流を積極的に推進し、地域社会との繋がりを強めることにより、大学の発展を図っていくことが一層重要になる」という趣旨が強調されており。

大学開放は今や大学運営の常態となり、何らかの形で“開放事業”が行われていない大学はないといってもよく、大学図書館の開放もその重要な一環として、各大学においてさまざまな形で展開されているのは周知のとおりです。

その結果、いまや、目録所在情報の学外への提供を始めとして、大学図書館の一般市民への公開は常識となり、市民への蔵書の館外貸出しさえも、別に珍しいことではなくなりつつあります。徳島大学附属図書館におかれても、本誌で既報の如く、「開かれた図書館」の方向へ向けて現在、具体の計画を進めておられるのは、誠に喜ばしく思われます。

筆者もかねてから、東京大学などいくつかの大学図書館や、県立図書館で管理運営に携わった経験から、開かれた図書館がこれからの新しい時代を拓いていく重要なキーワードの一つであるという思いを強く抱いておりましたので、このたび、本誌編集部からのご依頼により、ここに小文を寄稿させていただきました。

大学図書館間での相互利用

ところで、開かれた大学図書館というのは、一般には、地域住民への公開という意味合いで使われますが、ここでは、それをもう少し広く解して、個別の大学図書館を越えた協力活動をも含めて捉えてみたいと思います。それは畢竟、設置母体の枠を越えて機能するという点では、原理的に共通するものがあるのと、大学間

において充実していく機能が、結果的には地域社会にも貢献することに繋がると考えるからです。

もっとも、かつて大学図書館の開放といえば、大学図書館間の協力活動を指していたような時代がありました。文献の相互貸借は、特に医学生物系の図書館などでは、戦前から組織的に行われておりましたが、利用者が直接、所蔵館へ出向いて図書資料を利用する、いわゆる訪問利用の制度は、それが国立大学全体で制度化されたのは、十数年前のことでした。

この制度化は、国立大学が加盟する国立大学図書館協議会（「国大図協」と略称）での2年掛かりの審議で決定されましたが、当初は、歴史が古く豊富な蔵書を有する特定の大規模大学と、そうでない多くの中小規模の大学との利害の対立があり、一時は、制度化が危ぶまれたものでした。

そのように、かつては、個々の大学の枠を越えた協力体制を整備しようとする、その意思形成に大変な時間と労力を費やさねばならなかったという苦い思い出があります。

電子図書館的機能による協力

しかし、幸いなことに、今や資料電子化の技術の急速な発達によって、遠隔地に居ながらにして、極めて高精度な複製本の利用が可能となりました。既に徳島大でも始めておられますが、東大、京大などいくつかの大学図書館では、相当数の図書の電子化を実施しており、その内容は一般市民でもインターネットを通じて容易に閲覧することができるようになっております。

また、電子ジャーナルの出現は、大学間でコンソーシアムを形成するなどの契約方法を工夫することによって、いままで文献複写によって補われていた図書館間相互貸借業務の在り方にも、改善の可能性が生まれてきそうです。

そして、なによりも、拡充された学術情報ネットワークと、コンピュータの性能向上により、図書館間での協働作業による各種のデータベース構築の可能性が広がったことによって、図書

館サービスの一層の向上が見込まれるようになってきました。

例えば、現在、東京大学附属図書館では、所蔵図書の目次情報や帯情報からの検策も可能となる、「ブックコンテンツ・データベース」の作成や、インターネット上の学術情報源のうち、教育研究上、有用な特定の情報源を収集し、効率的な検索が可能となるように加工を施した「インターネット学術情報インデックス」を作成し、試行サービスを行っています。原理的にはネットワークを介して協働作業ができるこの種のデータベース作成事業は、多くの大学図書館が参加することになれば、その効率も効果も高まることが期待できます。

また、現在、九州地区においては、大学図書館におけるレファレンスの事例データベースを共同構築する構想が検討されておりますが、これも、かねてから実務者の間で望まれていたものであり、また、公共図書館でも既に名古屋市において試行されていることでもあるので、是非、大学図書館においても、国大図協などの組織を通じて、全国規模でその構想が実現されることを期待しております。

公共図書館との連携

一方、“館種”を越えた協力活動として、大学図書館と公共図書館との協力活動も、積極的に展開されるようになってきております。特に、最近、一般市民の資料要求にも学術的なものが含まれるようになってきており、従来の公共図書館の収書では、なかなか対応しきれなくなっていることから、大学図書館と公共図書館との連携が強く求められるようになってきました。

例えば三重県では、一昨年から稼動している三重県図書館情報ネットワーク（MILAI）の総合目録データベースに、三重大学附属図書館も所蔵データを提供して、県内全域の館種を越えたILLシステム（県外からも利用可能）に参加して、市町村立図書館からの図書の相互貸借にも応じております。これによって、例えば、遠隔地の小さな町の住民でも、その町立図書館を介して、大学図書館に所蔵されている学術的な図書資料を利用することが、以前に比べてかなり容易にできるようになっているのは、地域住民への公開と、館種を越えた協力体制がより進んだ形の好例の一つであるといえましょう。

今後の取組み

そこで、このような開かれた図書館のさまざまな効果を一層あげて行くためには、今後、各大学で次のような事柄に取り組んで行くことが必要なのではないかと思っております。

まず第1に、国の学術政策並びに高等教育政策を踏まえて、大学図書館運営の基本理念を全学的に明示することが大事であると思えます。それは単に図書館関係者が共通認識を持つだけに止まらずに、全学の構成員に理解を深めてもらうことが肝心であるからです。

第2に、今後、より開かれた図書館を実現する手段としての電子図書館的機能の充実を図って行くためには、日進月歩の技術革新の成果を、図書館業務の中に取り込んでいくために、研究開発組織を、図書館の内部あるいは図書館を含む学内組織の中に制度化し、研究者を配置していくことが是非とも必要であると考えます。この課題は、もはや、かつての図書館業務機械化のような、図書館職員の独学でカバーできるレベルを超えた領域であるからです。

第3に、他大学、あるいは他の図書館など、学外の組織との連携を積極的に創り上げて行くことです。これは、図書館のいわば、経営方針として明確化し、図書館の幹部が率先して進めていくべき事柄であろうと思えます。

そして第4に、これが最も重要な課題であろうと思えますが、図書館職員の力量を高めて行く手立てを、制度的かつ計画的に進めて行くことです。例えば、図書館情報大学は博士課程を含む大学院の門戸を現職者にも開いており、内地留学などによってリカレント教育が受けられます。また、進んだ図書館システムや優れたコレクションを持つ大学・学術図書館での長期実務研修を行うなどの方策を講じることによって、職員のスキルアップを図ることが必要です。

ともあれ、これからの大学図書館は、学内だけで自足する施設あるいは組織の一つとしてではなく、広く開かれた存在としての情報図書館でなければならないという発想の下で、全学の構成員に認めてもらい、その発展に必要な諸々の手立てを、全学を挙げて講じて行くことが、なにより肝心ではないかと思っております。

（あめのもり・ひろゆき

名古屋女子大学事務部長）



最先端の絵図高精細画像データ

- 平成 11 年度文部省科学研究費助成 -

平井松午

附属図書館では平成 10 年度に引き続き、平成 11 年度も文部省科学研究費補助金研究成果促進費（データベース、交付額 783 万円）を受けて、新たに 19 点の絵図の画像データを作成した。19 点の中には、「阿波国大絵図」や「隠密偵察記附図」など徳島関係 6 点のほか、3 葉の官板実測日本地図、それに「地球全図」などの世界図 9 点が含まれる。

このうち、「阿波国大絵図」（徳 2）は縦 4.25 m、横 5.09 m と本館が所蔵する絵図では最も大きく、唯一残る阿波国の元禄国絵図（推定）でもある。隣国と国境を確定したのちに作成された本図は、それまでの慶長期・寛永期・正保期の阿波国絵図と比較して形状が著しく矯正されただけでなく、狩野派の絵師に描かせたこともあって美しい仕立てとなっている（本誌 No.56 に本図の写真を掲載）。

本図は図幅の大きさに対して、郡名などに 1 mm 程度の極小朱字でルビが打たれていて、画像データ化にはもっともやっかいな絵図の一枚であるが、本図についても本誌 No.61 で紹介した方法で約 2GB の高精細画像データを作成した。本図については折り目個所の破損が甚だしいため修復を行ったが、この画像データによって修復前の原図の状態を忠実に再現できるのも、貴重資料デジタル化の大きな利点といえる。

このほか、昨年度の事業では、前年度に作製できなかった官板実測日本地図（北蝦夷／蝦夷諸島／畿内・東海・東山・北陸）もデータ化した。本館が所蔵する伊能図 10 点はすでに前年度にデジタル化が終了しているが、これら 3 葉の官板実測日本地図を追加したことで、本館が所蔵する伊能図類 14 点がデジタル化されたことになる（ただし、統合画像データが一部未完成）。これらの絵図自体が全国的にも貴重な文化財であることは言うまでもないが、伊能図類がこれだけまとめて高精細画像データ化されたのは初めてのことであり、原図とともに本学

附属図書館が全国に誇れる事業である。

昨年秋には徳島県立博物館を会場に所蔵の伊能図 10 点・官板実測日本地図 4 点を展示した企画展「伊能忠敬が描いた日本」が開催され、約 1 ヶ月という期間にも関わらず 4000 人を超える入場者があった。展示ではとくに、常設していた本館作成のデジタル画像のプレゼンテーション「伊能図の世界」と「阿波・淡路の近世絵図」が好評を博していた。これは、予め設定した絵図画像と解説を自動再生するだけでなく、入力されている絵図画像データを自由に引き出し、拡大・縮小して見ることができるものである。

従来、絵図の展示会では原図を展示ケースに入れるため、細部を熟覧することは不可能であった。絵図のデジタル画像は、まさにこうした展示にも大いに効力を発したといえる。日本地理学会では国立地図学博物館設立推進委員会を設けて地図博物館の設立を目指しているが、今後こうした博物館の展示にデジタル画像データが大いに寄与することが期待される。そうした面でも、本学の絵図高精細画像デジタルデータ化事業は一步先んじた事業といえる。

なお、平成 11 年度にデジタル化した絵図画像データについては、早い時期に図書館ホームページに開設されている「貴重資料高精細デジタルアーカイブ」に追加するとともに、新規の高精細画像データについては附属図書館での閲覧公開も予定である。

（ひらい・しょうご 総合科学部教授）



電子ジャーナルサービスの提供

雑誌情報係

電子ジャーナルとは、従来冊子体で提供してきた学術雑誌をコンピュータを使って電子的に閲覧できるものです。

かなり以前から二次資料に関しては電子的なサービスがなされており、本学においても、MEDLINE、Chemical Abstracts、Current Contentsの学内でのネットワーク利用が可能になっています。

しかし、近年のインターネットの普及拡大とともに、一次資料である学術雑誌そのものの全文（フルテキスト）を閲覧できるようになってきました。国内の学協会誌は国立情報学研究所（前・学術情報センター）の電子図書館サービス（NACSIS-ELS）が充実しつつあり、外国雑誌については各出版社のサービスが急速に増加しています。

こうしたことから本学でも、1998年5月、図書館ホームページから、学内で利用可能な外国雑誌の電子ジャーナルの提供を開始し、現在おおよそ240タイトルが利用できます。

電子ジャーナルの特徴

冊子体に比べると、印刷、輸送前に掲載されるため、速報性が一番の特徴です。また、雑誌によっては著者、キーワードなどで検索できるものもあります。しかしまだ、バックナンバーまで収録している雑誌は少ないようです。

電子ジャーナルの購読形態

電子ジャーナルには、冊子体がなくOnlineでのみ提供されているものは少なく、つぎの2つのタイプが多くなっています。

① 冊子体の購読者は無料で利用できるもの。

本学がサービスしているタイトルのほとんどがこのタイプのものです。

Wiley 社 (InterScience) 、Springer 社 (LINK) 、AMS (米国数学会) 、APS (米国物理学会) 、IOP (英国物理学会) 、Oxford University Press、Royal

Society of Chemistry の発行誌や、Proceedings of the National Academy of Sciences of the USA、EMBO Journal など。

これらは徳島大学の IP アドレスを申請しているため、学内でのみフルテキストを見られます。

但し、Nature、New England Journal of Medicine のように、IP アドレスでなく独自のパスワードを申請し、それを使って利用するものもあります。

冊子体価格以外に別料金がかかるもの。

Print のみ、Online のみ、Print+Online と3タイプに分けている雑誌が多いようです。本学では Development、Journal of Biological Chemistry (JBC) を購読していますが、参考までに2000年版のそれぞれの価格は次のようになっています。

	Print	Online	Print + Online
Development	£ 1,236	1,150	1,421
JBC	US \$ 1,900	1,200	3,100

登録作業の実際 - 利用できるまで

外国雑誌は、教育・研究上支障が生じないように、国内の代理業者（Agent）を通じて購入し、安定供給をはかっています。しかし、できるだけ安価に購入するために、複数の業者から見積りを取り、もっとも安く納入してくれる業者から購入します。そのため同じ出版社の雑誌でも納入業者が異なり、また、年によって変更が生じます。

冊子体購読者への無料電子ジャーナルの手続きでは、業者を通じて同意書（Agreement）を送付したり、あるいは本学でOnlineで登録できる場合でも、冊子体の購読者であることを証明する Subscription Number（購読者番号）を明記しなければならず、業者からの情報が必要です。



しかし最近の急速な増加に追いつかないためか、業者の対応にも差があり、業者が積極的に情報を知らせてくれることは希です。本学の場合でも、冊子体を受入しているものについて Online サービスの情報を収集し、こちらから連絡して業者に手続きを依頼するケースがほとんどです。

無料購読の中止(有料化)、契約の更新などで利用が中断し、教官からのクレームではじめて気づき、リストから削除したり、登録の更新をするケースもあります。

今後変更に関しては十分注意をはかっているつもりですが、新規もふくめて、先生方からの情報もお寄せいただければ幸いです。

これからの電子ジャーナルの導入

本学では今のところ、冊子体購入に付加した無料購読のサービスが中心ですが、大学によっては冊子体をやめて Online のみに変えているものも多くなっているようです。

ご承知のように、本学でも書庫の狭隘化が深刻化し、購入雑誌はなかなか廃棄しにくいいため、寄贈雑誌を見直すことでどうかスペースを確保しているのが現状です。電子ジャーナルは省スペースのためには願ってもないものですが、まだ将来的にどうなるか不透明であり、もし中止した場合に過去のものを見られるのか、といった問題もあります。先にあげた Development は、1 年間の刊行が終わると CD-ROM が送られてきます。すべての雑誌がこのようになればいいのですが、まだ現状はそうでもないようです。

また、外国雑誌の価格は年々高騰し、多くの大学で中止が増加し問題となっています。本学でも 1998 年 102 タイトル、1999 年 105 タイトル、2000 年は 98 タイトルを中止しました。それでも購読料は 10% 以上の増加です。幸い 2000 年は円高もあり、原価の上昇が多少は相殺されたものの、来年はわかりません。

先の JBC (Print 版) についてここ数年の価格を比べると次のようになります。

	原価契約	為替レート	円価
1996	US \$ 1,340	101.69	136,264 円
1997	US \$ 1,600	112.61	180,176 円
1998	US \$ 1,750	122.42	214,235 円
1999	US \$ 1,850	126.47	233,969 円
2000	US \$ 1,900	107.53	204,307 円

実際の購入価格はこの円価ではなく、さらに業者の手数料や消費税が加わりますが、値上がりの状況はわかるかと思えます。それでも JBC はまだ、原価の値上がり率が非常に少ない雑誌です。毎年、原価が 20%、30% と値上がりする雑誌もあります。

こうした価格面からも、多少でも安いのなら電子ジャーナルにしたほうがその分、別の雑誌を購入できます。

一つの大学にとらわれず、いくつかの大学で共同して利用をはかるコンソーシアム構想もあります(国立大学図書館協議会の IDEAL (Academic Press) のトライアル、日本医学図書館協会の ProQuest トライアルなど)。しかし、規模も学部構成も異なる各大学の費用の負担割合をどうするか、契約方法など、まだまだ実現のためには多くの問題があるようです。

本学だけを見ても、特に常三島地区では、各研究室の研究費で購入している雑誌がほとんどです。そのため、電子ジャーナルのような共同で利用する場合の費用の負担についてはいろいろな問題が生じます。しかし、各研究室の予算のなかから、年々高騰する雑誌を購入し続けるのは大変です。

図書館としては、限られた予算の中でいかに多くの雑誌を利用できるか、いろいろな可能性を探り、提案し、教室やキャンパスの枠をこえて調整していくことが今後の課題と考えます。



ちょうりゅう

学術講演会 (1999.11.26.)

平成 11 年 11 月 26 日、講師に雨森弘行氏 (名古屋女子大学事務部長) を招き、「図書館ネットワークの形成と新たなサービスの展開」と題した学術情報に関する講演会を開催した。学内は言うに及ばず、近隣の大学附属図書館、公共図書館からの参加があり、新たな図書館ネットワークに対する関心の高さがうかがわれた。(本文 8 p. の記事を参照)

学術講演会 (2000.1.26.)

平成 12 年 1 月 26 日、講師に甲斐重武氏 (熊本大学附属図書館情報管理課電子情報係長) 栗山正光氏 (筑波大学附属図書館情報システム課専門員) を招き、それぞれ、「情報基盤構築を目指した学内調整～熊本大学附属図書館の例」、「電子図書館の構築～筑波大学電子図書館の事例を中心に」と題して学術情報に関する講演会を開催した。熱心な聴衆から質問が相次ぐ盛況ぶりだった。

科学研究費補助金による古絵図・伊能図の高精細デジタル画像データ作成(第 2 年度)

平成 10 年度に開始した高精細デジタル画像データ作成であるが、平成 11 年度も引き続き科学研究費補助金の交付を受け、逐次デジタル化を進め、47 点が高精細デジタル画像化された。



県立博物館企画展「伊能忠敬の描いた日本」好評のうちに終了 (1999.9 ~ 10)

当館特別協力の下、平成 11 年 9 月 15 日から 10 月 13 日まで、徳島県立博物館で開催された「伊能忠敬の描いた日本」は、予想を上回る来館者を記録し、好評のうちに終了した。

Win3.1 による CA on CD のサポート中止

CA on CD は、2000 年 1 月号以降、Windows3.1 をサポートしなくなった。

雑誌記事索引ネットワーク利用

雑誌記事索引 (NDL CD-ROM Line) は、国立国会図書館作成の国内刊行学術雑誌に掲載された論文の標題、著者名、掲載雑誌名、巻号、ページ等を収録した索引データベース。

附属図書館内では本館マルチメディアプラザの 13 番の CD-ROM 検索パソコンで利用できる。

収録対象誌：学術雑誌約 7,000 誌

収録範囲：1990 年～

更新頻度：年 6 回

動作環境：Windows95、NT3.51、NT4.0、MS-DOS(Ver.5.0 以上)

利用法 (インストールから起動まで) は、ホームページ参照のこと。

図書検索 (OPAC) の機能強化

WWW 版 OPAC の機能が強化された。検索の高速化、リンク検索、ブックマーク、フレーズ検索、絞り込み検索等の機能が新たに加えられた。

Science Direct Web edition 開始

2000 年 4 月から Elsevier 社の SDWeb (Science Direct Web-edition) が図書館ホームページから使えるようになった。

徳島大学が購読している雑誌のフルテキストを見ることができる。

英国物理学会 (IOP) 刊行の電子ジャーナル の試験提供延長

「英国物理学会 (IOP: The Institute of Physics) 刊行の電子ジャーナルの試験提供は、1年間延長して、平成13年3月31日まで、継続して利用できることになった。

電子ジャーナル無料トライアル

中国四国地区国立大学附属図書館協議会のもとに設置された「地域共同サーバ検討ワーキンググループ」が試行的に「電子ジャーナル無料トライアル」を行った。

対象：中国四国地区 13 国立大学
機関：平成 11 年 10 月～ 12 月

ProQuest 無料トライアル実施

3月から5月まで、400誌以上の医学/看護学系雑誌の全文とイメージがインターネットで閲覧できるProQuestの無料トライアルを実施した。

無人入退館システム (蔵本分館)

蔵本分館では、無人入退館システムを導入することにより、5月8日から、研究者が学術雑誌の閲覧・複写をする場合に限り、通常開館時間外に利用することが出来るようになった。

ただし、利用に必要な磁気カードは「時間外特別利用申請書」と交換で貸与される。

PubMed の使い方を作成 ホームページにリンク

NIH (National Institute of Health) の公開する PubMed にアクセスし検索するための『PubMed の使い方』を作成し、公開した。



平成 11 年度 NACSIS-IR (新 IR 対応) 地 域講習会開催

平成 11 年 10 月 13 日午後、徳島大学総合情報処理センターにおいて新 IR 対応の NACSIS-IR 地域講習会が開かれた。学術情報センターの石原、桜井、風巻 3 係長を講師に、学内外からの 27 名の参加者が新 IR および、電子図書館を体験した。

.....

本学教官著作寄贈図書

寄贈者	著者名	書名
村上光太郎	G.W. ギルバート	世界の薬食療法 - くすりになる食べ物
坂東 永一	日本補綴歯科学会	健康科学における歯科補綴学
東 潮	東 潮	古代東アジアの鉄と倭
伊藤 利明	大橋守他著	これならできる情報リテラシー
東 潮	東 潮	伽耶はなぜほろんだか - 日本古代国家形成史の再検討
高杉 益充	横田雅也他著	疾患と臨床薬理
高杉 益充	高杉 益充	薬剤識別コード事典 平成 12 年改訂版
堀江 徳愛	堀江 徳愛	フラボノイドの合成 - フラボン、フラボノール、イソフラボン

人 事 異 動

平 11 . 10 . 12

採 用 (情報サービス課情報サービス係)

東 良 栄 一	笠 井 公 子
片 山 知 子	今 津 珠 代
関 本 松 美	藤 本 智 子

平 11 . 12 . 15

退 職 (情報サービス課情報サービス係)

東 良 栄 一	笠 井 公 子
片 山 知 子	今 津 珠 代
関 本 松 美	藤 本 智 子

平 12 . 1 . 31

辞 職 (情報サービス課情報サービス係)

高 田 直 樹	矢 武 純
---------	-------

平 12 . 2 . 29

辞 職 (情報サービス課分館情報サービス係)

谷 口 章 子	井 上 陽 子
河 本 正 和	瀧 下 順 子

平 12 . 3 . 1

採 用 (情報サービス課分館情報サービス係)

西 堀 恭 英	三 好 真理子
栗 島 綾	清 水 寿美恵

平 12 . 3 . 31

定年退職 (事務部長)

山 本 久

定年退職 (情報サービス課分館情報サービス係長)

櫻 木 強

平 12 . 4 . 1

事務部長

木 村 伸 夫 (名古屋大学附属図書館情報管理課長)

医学部総務課第一総務係総務主任

原 田 直 樹 (情報管理課図書情報係図書情報主任)

情報管理課図書情報係長

吉 田 敬 治 (情報サービス課情報サービス係長)

情報管理課雑誌情報係長

岡 田 恵 子 (情報サービス課学術情報係長)

情報サービス課情報サービス係長

森 隆 文 (学生課専門職員)

情報サービス課電子情報係長

折 原 善 彦 (情報管理課分館資料情報係長)

情報サービス課分館情報サービス係長

近 藤 英 子 (情報サービス課分館情報調査係長)

情報管理課図書情報係図書情報主任

樫 本 公 一 (情報管理課総務係総務主任)

情報サービス課情報サービス係

宮 本 晴 江 (鳴門教育大学教務部学生課留学生係)

情報サービス課電子情報係電子情報主任

前 田 朋 彦 (情報サービス課学術情報係)

情報サービス課分館情報サービス係

横 川 紀 子 (情報サービス課分館情報調査係)

情報管理課分館資料情報係長 (併任)

上 田 智 一 (情報管理課図書館専門員)

情報サービス課学術情報係長 (併任)

折 原 善 彦 (情報サービス課電子情報係長)

情報管理課図書情報係

相 原 三 恵 子 (情報管理課分館資料情報係)

情報管理課分館資料情報係

真 鍋 佳 子 (情報サービス課分館情報サービス係)

情報サービス課情報サービス係

杉 本 和 代 (情報管理課図書情報係)

情報サービス課分館情報サービス係

笹 賀 瑞 枝 (情報サービス課情報サービス係)

情報管理課図書情報係

清 重 潤 子 (情報管理課分館資料情報係)

情報管理課分館資料情報係

原 井 美 紀 (情報サービス課分館情報調査係)

情報サービス課分館情報サービス係

高 砂 君 代 (情報管理課図書情報係)



会 議



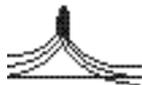
・学 内

- 平 11 .11 .16 第 4 回医学部図書委員会
 12 .7 第 4 回蔵本分館運営委員会
 平 12 .1 .18 第 5 回蔵本分館運営委員会
 1 .31 第 3 回常三島地区運営委員会
 1 .31 第 4 回附属図書館運営委員会
 ・文部省学生図書購入費（第 2 次）
 等の推薦割当額について
 ・徳島大学附属図書館運営委員会
 規則の改正について
 ・徳島大学附属図書館蔵本分館運
 営委員会規則の改正について
 ・徳島大学附属図書館本館新営計
 画について

・学 外

- 平 11 .10 .7 ~ 8 平成 11 年度国立大学図書館協議会
 中国四国地区協議会実務者会議
 （於：ホテル播磨屋）
 10 .21 ~ 22 第 35 回日本医学図書館協会中国四
 国部会総会
 （於：東京第一ホテル松山）
 12 .3 平成 11 年度中国四国地区国立大学
 附属図書館事務（部・課）長会議
 （於：広島大学附属図書館）
 平 12 .1 .20 平成 11 年度国立大学附属図書館事
 務部長会議（於：群馬大学）
 3 .22 徳島県大学図書館協会総会
 （於：徳島文理大学）

研 修



- 平 11 .10 .13 平成 11 年度NACSIS-IR(新IR対応)
 地域講習会
 （於：総合情報処理センター）
 講師石原栄一 学術情報センター・
 データベース課数値画像データベ
 ース係長
 桜井美智雄 学術情報センター・デー
 タベース課調査係長
 風巻みどり 学術情報センター・共同
 利用課情報資料係長
 10 .19 ~ 21 徳島地区国立大学主任者研修
 （於：鳴門教育大学）
 10 .20 ~ 22 第 40 回中国四国地区大学図書館研
 究集会（於：ホテルモナーク鳥取）

- 11 .15 ~ 19 中国四国地区国立学校等会計事務研
 修会（於：徳島大学）
 11 .17 ~ 19 徳島地区国立学校中堅職員研修会
 （於：阿南工業高等専門学校）
 11 .26 徳島大学学術情報に関する講演会
 （附属図書館大視聴覚室）
 講師雨森弘行 名古屋女子大学事務部
 長
 平 12 .1 .26 平成 11 年度徳島大学学術情報に関
 する講演会(附属図書館大視聴覚室)
 講師栗山正光 筑波大学図書館部情報
 システム課長補佐
 甲斐重武 熊本大学附属図書館情報管
 理課電子情報係長

編集後記



2000 年という年は、新しい「ミレニアム(千年紀)」
 を迎えた年であると同時に、20 世紀最後の年でもあ
 る。

昨年 1999 年においても、2000 年という年は「コン
 ピュータ西暦 2000 年問題」をはじめとしているとい
 うと話題になっていた。今年の後半になると「21 世
 紀」に関連してまたぞろ大騒ぎになるかもしれない。

その騒ぎに便乗するわけではないが、大学図書館
 にとっては 2000 年から 2001 年にかけてどうやら

turning point になりそうに思われる。大学図書館と
 密接な関係にあった学術情報センターは、この 4 月
 に国立情報学研究所に改組された。2001 年 1 月には、
 文部省は、科学技術庁と合併改組して文部科学
 省になる。独立行政法人化の問題もある。

これらにあわせて、図書館のあり方、サービスの
 あり方、さらには、この「すだち」のあり方も再検
 討が必要になってきているのではないだろうか。

徳島大学附属図書館報「すだち」No.62
 2 0 0 0 年 5 月 3 1 日
 編集館報編集委員会
 発行 徳島大学附属図書館

<表紙デザイン・レイアウト> 清水 國 夫
 〒770 - 8507 徳島市南常三島町 2 丁目 1 番地
 TEL(0 8 8) 6 5 6 - 7 5 8 4
 FAX(0 8 8) 6 5 6 - 9 0 1 6